

二〇一九年 卒業論文

親鸞浄土教における救い

（現当二益）

コピー 厳禁

L160130

和田 真実

目次

序論	1
本論	3
第一章 仏教的歴史観を通して見る聖道門から浄土門への変遷	3
第一節 仏教とはく生死の苦しみを通しての救済について	3
第二節 仏教の特色く聖道門と浄土門	5
第三節 三時思想からみた仏教く道綽浄土教における教学(聖浄二門)を通して	7
第二章 親鸞浄土教における現生正定聚の特色	10
第一節 親鸞以前の浄土教における救済についてく臨終来迎	10
第二節 親鸞浄土教における救済についてく現当二益	12
第三章 親鸞の著述から読み解く現生正定聚の表現	15
第一節 『教行信証』における現生正定聚の表現	15
第二節 『浄土和讃』における現生正定聚の表現	1
第三節 現生正定聚における「等しい」という表現について	2
第四節 『親鸞聖人御消息』(『末灯鈔』)における現生正定聚の表現	3
結論	4

註
参考文献

コピー厳禁

序論

親鸞(一一七三〜一二六二)が説いた救いを表すものに「現当二益¹」の教えがあり、これは現生正定聚という現益と、往生即成仏という当益のことを示している。特に、現生正定聚²という考えは真宗学の特色において、多く取り上げられ、また、親鸞が初めて仏教の利益として明らかにした重要な教えであり、親鸞独自の思想(己証)でもあると評価されている。

しかしながら、学部生の四年間、仏教(主に真宗学)を学んできたが、この親鸞の己証ともいえる現当二益、特に現生正定聚の教えは、通仏教の立場から考えてみると親鸞独自の考えとは一概に言えないのではないかと、すなわち、現生において往生が定まるという考えは聖道門にも通じる考えがあるのではないかという疑問が浮かび上がった。元々仏教は、聖道門的なものであり、生きている間に悟りを得る(成仏する)、あるいは、生きている間に正定聚(初地)を得ることを目的とする思想であるが、その内容は、親鸞の「現生にて正定聚を得る。」という考えと類似していると受け取られることも少なくない。

しかし、もう少し詳しく説明するならば、まず「定聚」とは正定聚³のことで、必ず悟りに至るべき地位に決定したものの、後戻りしない、もう仏になるしかないという位⁴が定まるといった意味があり、一般的な浄土教の考えからすると、浄土に往生してから得られる位のことを指す。また、中村元『広説佛教語大辞典(縮刷版)』によれば「正定聚」とは、

① 衆生を三種類に分けたうちの一つ。必ず仏となるべく決定されている聖者をいう。倶舎の教学によると、

苦法智忍を得た位をいう。〈『俱舍論』〉②さとりまで退転なく進んでやまぬ菩薩に仲間入りすること。仏道不退の菩薩の仲間。〈『十住毘婆沙論』〉〈『往生論註』〉⁵と説明されている。

では、聖道門と浄土門それぞれにおける正定聚はいつ、何が定まるのかというと、聖道門では「現世に成仏」が、浄土門では「臨終に浄土往生」がそれぞれ定まる。親鸞聖人によると、正定聚は現生での利益であるとしていることから、聖道門と親鸞浄土教における「正定聚」の考えは類似していると考えられる。

すなわち、この現生正定聚は、浄土門だけで考えると親鸞が初めて「現生で往生も成仏も定まる。」と説いたのだ、とは言えるが、聖道門を含め仏教全体から見みると、親鸞が初めて現生において正定聚が定まると提言したとは言い難く、よって現生正定聚は親鸞独自の思想とは言えないのではないだろうか。

しかし、何故ここまで親鸞の正定聚の考えは特徴的であると真宗学などでは大々的に説明されているのだろうか。正定聚の言葉自体は、聖道門と同じように捉えることもできるが、何故親鸞の説いた正定聚の意義は重要であると言われるのか。正定聚は親鸞の数多くある己証の中でも特に代表的な教えとして説明されていることが多いが、「親鸞の正定聚の考えは、聖道門の正定聚の考えとは、また違うものである。」ことを明確にし、先に提示した疑問を解決すべく論証をしていきたいと私は考えた。

そこで、今回、親鸞浄土教における救い、つまり現生正定聚について何故ここまで重要な教えとされているのかについて、まず、浄土教が誕生するまでの流れや、仏教の歴史観(三時思想)などを踏まえながら、これらの

疑問を解いていき、次に、道綽の發揮である「聖浄二門」を取り上げ、一言で同じ「浄土門」と表現したとしても、親鸞以前と親鸞とは違った考えになっている理由や、その理由により親鸞浄土教がいかに関特徴的であるかということ、さらに、親鸞浄土教における救い、つまり現生正定聚を親鸞はどのように表現をし、また、我々にどのように伝えようと、説明しようとしているのか。これらを明確にすることにより親鸞浄土教における正定聚の重要性を再認識することができるはずである、と私は仮定をし、本論にてそれぞれ論じていく。

本論

第一章 仏教的歴史観を通して見る聖道門から浄土門への変遷

第一節 仏教とは 〴〵生死の苦しみを通しての救済について

仏教は釈尊を開祖とする宗教であり「仏」と「教」との二つの語(概念)から構成された合成語であり、一つ目に仏之教…仏による教え、仏の教え、二つ目に仏即教…仏という教、仏の説かれた教、三つ目に成仏教…仏になる教、仏となる教え、これら三つの解釈が昔からされている。仏教は、釈尊によって説き示された教えであり、この世に出られ悟りを開かれた釈尊が我々に示した教法のことを指す。また、釈尊が悟られたのは不滅の真理であり、仏なるものは不滅の真理である法を悟った存在であるからこそ、仏がそのままの教えであり、教えがその

まま仏であるという意味合いも持っている。そして、仏陀(釈尊)の説かれた教法を信じ、仏道を歩むことにより我々は悟りを開き仏となる、という教えも仏教が持つ意味でもある。⁶

また、今日、世界中には様々な宗教が存在しているが、どの宗教にも共通して言えるであろう教えや思想に「救済」というものがある。仏教もこれに然りである。我々人間は生きていく間や死んだ後などに対して「救われた」と願いつつも、苦悩や煩悩などにより現に迷っているため、生死に対して不安を抱いてしまう。特に、死んだ後どうなるのかということとは死んでみなければ知り得ないことであるからこそ、死に対しての不安は大きなものとなる。ここでいう「死」とは、「死ぬこと」自体に対する恐怖や不安といった苦しみではない。当然死ぬこと自体に対して、そういった思考が存在することも事実ではあるが、ここでは、死ぬことによって「引き起こる」恐怖や不安のことである。

例えば、死んだことによって、「大切な人と別れることになった。」また、「趣味である旅行をもっと経験をしたかった。」というように、人それぞれ違った苦しみではあるが、苦しみの原因となる理由・内容は違えども「苦しい」という感情が生まれるのは皆同じである。人の死というものは、突然の事故や身体的病気によるものなど原因は様々である。いつどこで何が原因で死を迎えるか分からない、死んだ後どうなるか分からないため、死に対する恐怖や不安が生まれるのである。だからこそ、こういった内容も死に対する「苦しみ」なのである。

しかし、仏教では、釈尊の説かれた教えを信じて仏道を歩み仏になることによって、生死の苦しみから解放される。それにより、人はいずれ死ぬという事実は変わらないが、死ぬことに対する恐れがなくなるのであるとい

った教えも説かれている。

第二節 仏教の特色 〔聖道門と浄土門〕

釈尊により説かれた教えは、聖道門と浄土門の二つに分けて考えることができ、聖道門の教えは、生きている間に修行をして悟りを開く教えである。浄土門の教えは、阿弥陀仏の本願力により、阿弥陀仏の極楽浄土に生まれ、そこで修行などをして悟りを開くという教えである。『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』とする）「化身土文類六（本）」においても、

おほよそ一代の教について、この界のうちにして入聖得果するを聖道門と名づく、難行道といへり。この門のなかについて、大・小、漸・頓、一乗・二乗・三乗、権・実、顕・密、豎出・豎超あり。すなはちこれ自力、利他教化地、方便権門の道路なり。安養浄刹にして入聖証果するを浄土門と名づく、易行道といへり。

この門のなかについて、横出・横超、仮・真、漸・頓、助正・雑行、雑修・専修あるなり。⁷

と御自釈にある通り、総じて釈尊が説かれた教えの中で、この世界で聖者となって悟りを得ることを聖道門とい、難行道という。この聖道門の中に、大乘と小乗、漸教と頓教、一乗と二乗と三乗、権教と実教、顕教と密教、豎出と豎超がある。これらすべて自力の教えであり、衆生を真実に導くための、仮の手だてとして説かれた教えである。一方、浄土に生まれて悟りを開くのを浄土門といい、易行道という。この浄土門の中に、横出と横超、方便と真実、漸教と頓教、そして助正と雑行と専修がある。⁸というように、釈尊の説かれた教えについて親鸞も

説かれている。

したがって、仏教という教えが生まれた時代に生きた人々は、第一節でも述べた通り、死に対する恐怖や不安といった苦しみから解放されるために、仏になること・仏と同じ地位に定まることを目指したのである。これらから分かる通り、釈尊の時代は現世に成仏が定まる聖道の考えが主流であった。

しかし、煩惱具足の凡夫である我々が、煩惱を無くし心を清らかにし聖道門の教えに従い修行をすることは可能なのだろうかと考えた時、浄土門の教えの意義が我々に意味を持つものとして生きてくるのではないだろうか。

浄土門の教えの流れとしては、初めに、インドにて龍樹菩薩(一五〇〜二五〇頃)が『十住毘婆沙論』(易行品)に難易二道を示し浄土の易行を説き、天親菩薩(四〇〇〜四八〇頃)は『浄土論』に願生思想を説かれた。そして、これらの教えは中国へと伝わり、龍樹菩薩・天親菩薩のインド浄土教の流れを受けて曇鸞大師(四七六〜五四二)・道綽禪師(五六二〜六四五)を経て善導大師(六一三〜六八一)に至って大成され善導流が中国浄土教の主流となった。やがて、中国の浄土教は日本へと伝えられるのだが、浄土門という浄土の教えが浄土宗として一宗独立するのは法然聖人(一一三三〜一二二二)に至ってであり、法然の教義は道綽の聖浄二門の思想を受けて、浄土の教えのみ末法の世に生きる我々に相應の教えであると法然は主張された。法然門下であった親鸞も法然の考えに対して『教行信証』後序に、

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これによりて、真宗の詮を鈔し、浄土の要を摭ふ。た

だ仏恩の深きことを念うて、人倫の嘲りを恥ぢず。もしこの書を見聞せんもの、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。⁹
と説明されており、また、『高僧和讃』においても、

本師源空世にいでて 弘願の一乗ひろめつつ 日本一州ごとく 浄土の機縁あらはれぬ

智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ¹⁰

と讃嘆されているように、浄土の教えが多くの人々に広まったのも法然聖人のおかげであると『教行信証』や『高僧和讃』で讃えており、そして、末法の世であるからこそ、阿弥陀仏の本願力を信じ、敬うことが大切であるということ説かれている。

第三節 三時思想から見た仏教 〔道綽浄土教における教学(聖浄二門)を通して〕

仏教には正像末の三時思想¹¹という歴史観が存在する。釈尊が入滅されてから五〇〇年間は、釈尊の正しい教えや正しい修行方法も存在し、それらを踏まえて悟りに至ることのできる者も存在し、これを「正法」という。しかし、その後は釈尊の教えや修行方法は残るのだが、悟りに至ることのできない時代がやってくる。正法に像(似)た時代ということから「像法」¹²と呼ばれる。そして、後に修行を実践する者もいなくなり釈尊の教えだけが残る時代、つまり「末法」という時代が訪れることとなる。この末法にも異説はあるが、一万年続くとされており、その後は教えさえもが消え法滅を迎えるとされている。¹³

この三時思想の考えと密接な関係をもつものとして取り上げられるのが、道綽の浄土観である。¹⁴そして、その道綽の代表的な教えの一つである「聖浄二門」は、親鸞の師である法然の教義に大きく影響を及ぼした発揮でもあることから、親鸞の浄土観の形成に大きな影響を及ぼしたことが容易に推察される。

したがって、親鸞の思想(今回でいう現生正定聚)の重要性を明確にするにあたり、道綽の思想(聖浄二門)を踏まえる必要がある。

聖浄二門とは、道綽の著書である『安楽集』「第三大門 輪廻無窮」に表わされている。ここで道綽は、釈尊の説かれた教えを聖道門と浄土門とに大きく二つに分けて考えられ、また、龍樹の難易二道と曇鸞の自他二力の説を受けて、浄土門こそが末法五濁の世に最も適した教えであり、実際に成仏する道は、ただ浄土門のみであるということ説かれている。¹⁵

この『安楽集』「第三大門 輪廻無窮」に、「第五にまた問ひていはく、一切衆生みな仏性あり。遠劫よりこのかた多仏に値ひたてまつるべし。なによりてかいまに至るまで、なほみづから生死に輪廻して火宅を出でざる¹⁶とあることから、道綽は「我々は仏性を具しているはずなのに何故未だ迷いの世界から抜け出せていないのだろうか。」という問いを立て、自ら、その問いに対し、

答へていはく、大乘の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。その聖道の一種は、

今の時証しがたし。¹⁷

つまり、ここでは釈尊の説いた教え(仏教)は、現世で成仏を目指す道を表す「聖道門」と、阿弥陀仏の浄土である極楽浄土において成仏を目指す道を表す「浄土門」の二門に分けられること¹⁸、そして、末法である今の世において聖道門を実践することは難しい。だからこそ、浄土門の教えを実践するべきである、ということ道を道綽は説かれている。

また、「一には大聖(釈尊)を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。」¹⁹というように、道綽は浄土門を勧める理由をここで述べている。

したがって、道綽の『安楽集』などから分かることは、我々が今生きているこの末法の時代においては、釈尊が説かれた教えは残っているものの、その教えに基づいた正しい修行方法は残っておらず、また、修行により悟りを開く者などはないということである。そのような末法の世を生きる者にとって、聖道門の教えを活かすことは極めて困難である。正しい教えがあるのにもかかわらず悟りを開くことができない我々は、一体どうすればよいのだろうか。その問いに対する答えは、浄土門の実践である。五濁の世の中で、煩惱具足の我々が成仏するためには聖道門の教えの通り、生きていくうちに修行をして仏となることを目指すのではなく、阿弥陀仏が建立された極楽浄土に生まれるほかないのである。阿弥陀仏の浄土は、清浄かつ静寂な世界で我々を誘惑するものがない環境であるため、仏になるための修学や修行に集中して励むことができるのである。

浄土教の教えは、末法の世を生きながら悟りを得て仏になりたいと強く願う人々に新しい教えとして受容され、浄土門を中心に広まっていった。そして、人が亡くなるにあたっては、阿弥陀仏や諸仏・諸菩薩たちが浄土から

迎えに来て、そして極楽浄土へ連れて行ってくださるという「臨終来迎」という考えに焦点が当てられるようになっていくのである。

第二章 親鸞浄土教における現生正定聚の特色

第一節 親鸞以前の浄土教における救済について 〔臨終来迎〕

第一章では、仏教は聖道門の教えが中心であったこと、三時思想、道綽の聖浄二門を述べたが、そこでは「現生正定聚」の思想が親鸞独自の解釈であることを未だ明確にすることができなかった。しかし、浄土教誕生までの流れを見ていく中で、浄土教の誕生以降、浄土教における救いの捉え方や考え方、また、往生から成仏に至るまでの考え方は、「臨終来迎」の思想を次第に強調するようになってきたことが理解できたと同時に、当時の人々にとって、死を迎えるに当たって重要な思想として受容されていったことに改めて気づかされた。

つまり、この臨終来迎という考えは、親鸞の己証である現生正定聚が聖道門での正定聚とは違った教えであるということを確認にするきっかけとなる内容ということであり、そして、序論で述べた通り私の抱いていた疑問を解決するであろう内容でもあると私は仮定した。その理由を述べていくことにする。

親鸞以前の浄土教の教えや考えとして、何故浄土に生まれたいと思うのか。その理由は、菩薩五十二位という求道者(菩薩)の修行の段階を五十二段階に分けたものがあり、求道者は、十信・十住・十行・十回向・十地・等

覚・妙覚と段階を踏んで修行を努めていく。初めの十信から十回向までの位を凡夫とし、初地からは聖者の位になり、この位(初地)になると仏になることが決定(正定聚)し、決して下の位には戻らないということから「不退転」とも呼ばれる。求道者は、まず初地を目指し修行をするが、やはり様々な欲(煩惱)を備えている凡夫であるため初地に至るまで進んだり戻ったりと修行がはかどらず、なかなか初地の位に至る(聖者になる)ことはできない。さらに、時代は末法の世に入っているとの考えもあり、求道者は、後戻りをせず、かつ、修行がはかどる環境のある浄土に生まれて仏果を得たいと願うのである。

また、このことは、『大経』下巻の十一・十七・十八願成就文においても説かれている。阿弥陀仏の願が成就したことを釈尊が述べられた文を「成就文」と言い、ここには、

それ衆生ありて、かの国に生るるものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆるはいかん。かの仏国のなかにはもろもろの邪聚および不定聚なければなり。十方恒沙の諸仏如来は、みなともに無量寿仏の威神功德の不思議なるを讃嘆したまふ。あらゆる衆生、その名号を聞いて信心歓喜せんこと、乃至十念せん。至心に回向したまへり。かの国に生まれんと願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。²⁰

というように、諸仏によって褒め讃えられる阿弥陀仏の名号(第十七願成就文)のいわれを聞いて、疑いなく信じ喜ぶ者(第十八願成就文)は、間違いなく浄土に生まれて仏となる(第十一願成就文)と、衆生往生の因果についての内容が説かれている。この衆生往生の因果は阿弥陀仏の本願から導き出されるもので、第十八願に信心と念仏による往生が誓われており、もしこの誓いが果たされなければ、私(法蔵菩薩)は悟りを開かない、という誓いも

成就したことで、法蔵菩薩は阿弥陀仏に成られた、ということ踏まえて、この阿弥陀仏の誓いを信じて念仏をすることによって必ず往生することができる、という内容もここでは説かれている。加えて、正定聚は浄土に生まれた人のことであることも、ここから読み取ることができる。

また、『観経』の上品中生にも、功德をもって阿弥陀仏に回向をし、浄土に生まれたいと願うことによって、命が終わる臨終の際に阿弥陀仏と観世音・大勢至・無量の衆とともに迎えにこられ、そして浄土に往生し後に不退転を得ることができるとい、²¹、というように正定聚や臨終来迎について説かれている。

第二節 親鸞浄土教における救済について（現当二益）

親鸞以外の浄土教においては、臨終来迎の重要性を強調しているのだが、親鸞は臨終来迎を全く問題とすることなく、また、臨終来迎の考えを超えた現当二益という考えを説かれたのである。この理由を裏付ける教えとして、親鸞は第十八願「たとひわれ仏を得たらに、十方の衆生、至心信樂してわが国に生ぜん」と欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずば、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」²² つまり、阿弥陀仏を心から信じて、浄土に生まれたいと願ひ、他力の三心を得て念仏を称える行人（他力信心の行人・正定聚の機）と、第十九願「たとひわれ仏を得たらに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、至心発願してわが国に生ぜん」と欲せん。寿終る時に臨んで、たとひ大衆と圍繞してその人の前に現せずは、正覚を取らじ。」²³ つまり、さとりを求める心を起こして、様々な功德を積み、心から浄土に生まれたいと願う行人（万行諸善の行人・邪定聚の機）、

そして第二十願「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を聞きて、念をわが国に係け、もろもろの徳本を植ゑて、至心回向してわが国に生ぜんと欲せん。果遂せずは、正覚を取らじ。」²⁴つまり、阿弥陀仏の名を聞き浄土に思いを巡らせて、様々な功徳を積んで心からその功徳をもって浄土に生まれたいと願う行人(自力念仏の行人・不定聚の機)を、それぞれ対比させて、第十八願の信心の行者は臨終を問題とせず、来迎をたのまない、という教えを明らかにしている。

つまり、眞実信心の行人(第十八願)は、攝取不捨のゆえに正定聚の位に住するため、自力心からなる諸行・雑行をたのんで往生を願い常に動揺している行人(第十九願)や、第十八願に説かれている名号を自力心をもって称えている行人(第二十願)とは違い、あえて仏の来迎をたのむ必要性は生じないのである。何故なら、平生に阿弥陀仏から回向される他力信心をいただき、既に阿弥陀仏の大悲に攝取されている(救われている)ことを知っているのだから、と説かれていることが理解できるからである。村上速水氏も『歎異抄』の第二条「念仏は、まことに浄土に生るるたねにてはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり。」²⁵という言葉を用いて、

来世の往生は問う必要がないほど、本願に投托した親鸞の往生の確信を表している。もし未来の往生を待ちのぞむようなよろこびであるならば、その信といい、念仏といわれるものは、往生のための手段方法となるもので、純粹に無償性のものであるといふことはできないであろう。²⁶

というように、臨終を問題とせず阿弥陀仏の来迎をたのまないと言った親鸞の意図を述べている。

加えて、阿弥陀仏の他力救済・摂取不捨の利益といったものが、いかに平等であるかを、桐溪順忍氏は『親鸞はなにを説いたか』において、

往生と同時に成仏するという思想は、絶対他力の思想からいえば当然のことであって(中略)人間の性格的差別、才能的差別や、修行の多少の差別、修行のときの精神的なものが、浄土に往生したのちにも影響があるということとは、絶対他力の往生、全部が全部如来の願力によって往生したとはいえなくなるのであります²⁷。と説明されている通り、第十八願の眞実信心の行人、つまり阿弥陀仏から疑うことなく受け賜った信心というものは、すべての者にとって平等であり、また、往生は現世で定まるといことが約束されているのであるから、命が終われば、往生と同時に成仏する「往生即成仏」という思想に繋がるのが理解できるはずである。

さらに、この「往生即成仏」の考えについて、日野振作氏は『親鸞聖人と七高僧の教え』において、

親鸞聖人より以前の浄土教は、ともすれば、浄土というもの(中略)仏道を修行するのにこの世よりは環境のよい・適したところと考えて、西方浄土を願生した人がほとんどでありました。そのような時代と社会と歴史において浄土眞宗は現生に仏となる身に定まり、しかも、往生即成仏の教えであると開顕された親鸞の己証は、それまでは誰ひとりとして明らかにすることのなかったご領解であります。²⁸

と説明されるように、当時の浄土教において親鸞の「現生正定聚」「往生即成仏」の考えが、いかに傑出した思想であり、また、親鸞の己証と言える思想であることが理解されるのである。

第三章 親鸞の著述から読み解く正定聚の表現

第一節 『教行信証』における現生正定聚の表現

親鸞は、自身の著作などにおいて、正定聚をどのように捉え、また、現生正定聚についてどのように表現をし、我々に伝えようとしたのか。

まず初めに、『教行信証』における現生正定聚の表現を見てみる。

親鸞は、正定聚を現生での利益であると受け取っている。中村氏の『仏教語大辞典』によると、正定聚とは、「③浄土真宗で、阿弥陀仏に救われて正しく仏になると定まった人びとをいう。すなわち第十八願に誓われ、他力念仏を信ずる人。〈『正像末和讃』〉〈『浄土和讃』〉」²⁹と説明されている。

浄土真宗の信心は、阿弥陀仏に全てを任せる(信順)ことで、阿弥陀仏の智慧と慈悲が行者のなかに入り満ちた心・仏となる徳をそなえた心を意味しており、救いはその信心を獲得した時に成立する(信心正因)。つまり、信心を得るのは現在、今生であるから「現生正定聚」と言い表されている。また、正定聚の行者は既に往生が定まっているため、行者の側から阿弥陀仏に往生を願うことも、臨終における来迎も願う必要がないのである。

また、『教行信証』「証文類」の冒頭部分にも「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲得れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。」³⁰と説かれており、正定聚は生きている間において他力回向の信心を獲得すると同時に得ることのできる利益であり、滅度は浄

土において得ることのできる利益である³¹と説かれている。

しかし、『大経』の第十一願には「たとひわれ仏を得たらんに、国中の人天、定聚に住し、かならず滅度に至らずは、正覚を取らじ。」³²とある。つまり、私が仏になる時、私の国(極楽浄土)の天人や人々が正定聚に入り必ずさとりを得ることができないようならば、私は決して悟りをひらきません。と誓いを立てられている。ここでは、浄土に往生した人々が、浄土において必ず悟りを得ることができるということが約束、誓われている利益として説かれているのだが、「国中の人天、定聚に住し、かならず滅度に至らずは」の「国中の人天」の部分からも分かる通り、正定聚は、浄土に往生してから得ることのできる利益として説かれているのは明確である。第十一願の成就文を見た場合も、「かの国に生るれば、みなことごとく正定の聚に住す」と説かれていることから、正定聚に住すことは浄土の利益であると理解しなければならぬはずである。それにもかかわらず、親鸞は正定聚を現生で得ることのできる利益であると説かれたのだが、その理由や根拠になるものとして『如来会』の第十一願成就文³³が挙げられる。

『教行信証』「証文類」にある『如来会』に、

かの国の衆生、もしまさに生れんもの、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん。なにをもつてのゆゑに。もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑなり

34

とある。この経文の中にある「かの国の衆生、もしまさに生れんもの、みなことごとく無上菩提を究竟し、涅槃

の処に到らしめん」とは、浄土に往生した人々だけではなく浄土にこれから生まれようとする現生に生きる人々も正定聚に住し必ず悟りをきわめ涅槃に至るのである、という意味になるのは明らかで、また、「なにをもつてのゆゑに。もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑなり」³⁵という部分は、浄土に生まれた人々や、これから浄土に生まれようとする現生の人々は、阿弥陀仏が浄土往生の因をたてたことを明らかに信知しているということから、これは正定聚を意味しているのであって、そして、浄土に生まれていない現生を生きる人々も正定聚であると説かれているのである。³⁶これら一連の内容から、正定聚は現生に定まることが理解できるはずである。これら踏まえた上で『如来会』の成就文(原文)と比較して読むと、「生彼国者」の部分を親鸞は、「彼ノ国ニ生まレントスル者」と読まれた、その意味を知ることができるのである³⁷。

また、まだ浄土に生まれてはいないが、後に往生する人も必ず滅度に至るということは、浄土に生まれる前、つまり、生きている間に正定聚に住しているということになる。普賢大圓氏も、『一念多念文意』の「国のうちの人天、定聚にも住して、かならず滅度に至らずは、」³⁸や「それ衆生あつて、かの国に生れんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。」³⁹を用いて、

これ即ち往生人は必ず滅度に至るが、定聚にも住すると見られたのであるが、それによれば往生人は必ず滅度に至るのであるから、それより前にある定聚に住するということは、現生でなければならぬことになる。

こゝに現生に正定聚に住し、彼土に至つて滅度をうるという願文の意となるのである。現生に於いて正定聚不退転に住するという聖語は、各処に多く散見するが、正定と滅度とを此彼二土に配当して理解されたのは、

宗祖の己証である。⁴⁰

と述べられている。

このように、親鸞は正定聚について、浄土で得る利益ではなく現生で得ることのできる利益であると説かれた論拠が明確になったわけであるが、ここで注意しなければならないのが「決して現生に滅度つまり悟りを得るものではない」ということである。その理由は『教行信証』『信文類』に現生十益に係してくる。この世で得られる利益は十種類あり、その十番目に「正定聚に入る利益をいただく」とあるのだが、これに関して親鸞の正定聚に対する誤った理解として「滅度密約」というものがある。滅度密約というのは、煩惱を滅した(悟った)ことを密かに得ているという意味で、つまり、親鸞は現生正定聚を言っているということから、信心の行者は「自分は滅度(悟り)を得たのだ。」といった誤った考え方に陥ってしまうことがある。しかし、親鸞は『一念多念文意』に「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと」⁴¹と説かれているように、親鸞は人間(衆生)について、様々な欲望や煩惱を持つ生き物であること、それらは命が終わろうとするその時まで消えることはないという事実、つまり、人間の真実の相を明確にされている。煩惱具足の我々人間であるからこそ、親鸞は『浄土和讃』において「如来すなはち涅槃なり 涅槃を仏性となづけたり 凡地にしてはさとられず 安養にいたりて証すべし」⁴²と説かれているように、凡夫である我々の身では現世で悟ることができないのだから、「我々は凡夫のままであり、かつ、微塵も悟っていない」ということが正しい解釈であるということを確認し

ておくことが大切である。

また『教行信証』にある、

『浄土論』にはく、「へ莊嚴妙声功德成就とは、偈に、《梵声悟深遠 微妙聞十方》といへるがゆゑにへ（浄土論）と。これいかんぞ不思議なるや。経にのたまはく、へもし人ただかの国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入るへと。これはこれ、国土の名字、仏事をなす。いづくんぞ思議すべきやと。⁴³

という部分においては、浄土に生まれた人だけでなく、まだ浄土に生まれておらず、かつ、これから浄土に生まれたいと願う人も含めて皆正定聚であるというように説かれているが、親鸞は曇鸞の『論註』に書かれていた「もし人、ただかの国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ずれば、また往生を得て、すなはち正定聚に入る」⁴⁴という教えの「剋念して生ぜんと願ずれば、また往生を得て」つまり「浄土に生まれた人のみ正定聚である」という部分を「剋念して生ぜんと願ぜんものと、また往生を得るものとは」つまり「剋念願生する人と浄土に往生した人、両者とも正定聚である。」というように内容を読み替えている。

また、親鸞はこの『論註』を『一念多念文意』においても、

『浄土論』にはく、「へ経言 へ若人但聞彼国土清浄安楽 剋念願生 亦得往生 即入正定聚へ 此是国土名字為仏事 安可思議」とのたまへり。この文のころは、「へもしひと、ひとへにかの国の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生れんと願ふひとと、またすでに往生を得たるひとと、すなはち正定聚に入るなりへ。これは

これ、かの国の名字を聞くに、さだめて仏事をなす。いづくんぞ思議すべきや」とのたまへるなり。安楽浄土の不可称不可説不可思議の徳を、もとめず、しらざるに、信ずる人に得しむとするべしとなり。⁴⁵

というように、繰り返し取り上げ改点している。また、『一念多念文意』の「若人但聞彼国土清浄安楽 剋念願生亦得往生 即入正定聚」と、『論註』の「若人担聞^{キテ}彼国土清浄安楽^{ナルラ}、剋念願^{シテスレバ}生^{ゼムト}、亦得^テ往生^ヲ、則入^{チルト}正定聚^ニ。」⁴⁶を比べてみると、『論註』の「則入^{チルト}正定聚^ニ。」の部分で親鸞は『一念多念文意』で「即入正定聚」と改点されているところから親鸞の正定聚の表現を読み取ることができる。

よって、親鸞は浄土に生まれた人だけが正定聚ではなく、まさに浄土に生まれようとする人、すなわち、他力の信心を得て浄土に生まれることが定まった人も正定聚なのである、と解釈された点、また、現世で往生・成仏が定まる「現生正定聚」を強調し説かれている点が、『教行信証』や『一念多念文意』による親鸞の改点から読み取ることができるのである。浅野教信氏も、『如来会』第十一願成就文と『往生論註』の文を例に、

現生の入正定聚を明らかにしようとする訓点が見られるのである。しかも、このような現生正定聚の主張は正因たる信の殊勝性を示すと共に信心者の誇りでもあり、さらに証果そのものの特色即ち往生即成仏義を構成することにもなっているのである。⁴⁷

というように、現生正定聚と往生即成仏つまり現当二益という考えの重要性を述べられている。

第二節 『浄土和讃』における現生正定聚の表現

続いて、『浄土和讃』において正定聚に関する和讃を見てみる。

安楽国をねがふひと 正定聚にこそ住すなれ 邪定・不定聚くになし 諸仏讃嘆したまへり⁴⁸

たとひ大千世界に みてらん火をもすぎゆきて 仏の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり⁴⁹

眞実信心うるひとは すなはち定聚のかずにいる 不退のくらゐにいりぬれば かならず滅度にいたらしむ

50

第一首目は、阿弥陀仏の本願力を信じ浄土に往生したいと願う人は、現世で正定聚の位となることが定まり、かつ、浄土に往生するが、自力の雑行・念仏などを修する人は阿弥陀仏の浄土に往生できない。第二首目では、大千世界が炎に満ち溢れたとしても阿弥陀仏の名号を聞くことで必ず正定聚の位に至りそして往生が定まる。第三首目では、眞実信心つまり阿弥陀仏(他力)の信心を得た人は即正定聚の位となることから、命を終えた後は必ず浄土に往生することが決まっている、とそれぞれ讃嘆されており、第一首目・第二首目ではそれぞれ、正定聚・不退を一回ずつ使用されているが、第三首目では正定聚と不退の両方を使用しており、また、第十一願の意を踏まえ、信心を得た人は生きている間に正定聚に住し未来は必ず滅度に至るということを讃じている⁵¹、ということも見て取れる。

第三節 現生正定聚における「等しい」という表現について

第三章の第一節でも述べたが、第十一願や第十一願成就文からも分かる通り、浄土に生まれた人々が正定聚の

位に入るとされている中で、親鸞は凡夫のままに正定聚の位に入ると説かれており、また、信心の行者は凡夫ではあるが聖者と同等であるとも説かれている。加えて、正定聚について、親鸞は信心の行者は必ず仏になることが決定していることから、一生補処の菩薩と同じ位だとして、弥勒菩薩と同じ等覚の位である「便同弥勒」や「次如弥勒」と表現し、また、阿弥陀仏の救済を受けた人々を「如来にひとし」とも表現されており、これらの根拠になる和語聖教が次の通りである。

『教行信証』「信文類三」には、

弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。⁵²

『浄土和讃』「現世利益讃」には、

信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまふ 大信心は仏性なり 仏性すなはち如来なり⁵³

『正像末和讃』「三時讃」には、

弥陀智願の回向の 信楽まことにうるひとは 攝取不捨の利益ゆゑ 等正覚にいたるなり⁵⁴

『親鸞聖人御消息』二〇（『末灯鈔』第七通）によると、

如来の誓願を信ずる心の定まるときと申すは、攝取不捨の利益にあづかるゆゑに、不退の位に定まると御こころえ候ふべし。眞実信心定まると申すも、金剛信心の定まると申すも、攝取不捨のゆゑに申すなり。さればこそ、無上覚にいたるべき心のおこると申すなり。これを不退の位とも、正定聚の位に入るとも申し、等

正覚にいたるとも申すなり。⁵⁵

これら親鸞の和語聖教を見ると「便同」つまり「便同弥勒」「如来にひとし」「等正覚」と説かれていることが見て取れる。また、特に『正像末和讃』『三時讃』や『親鸞聖人御消息』（『末灯鈔』）第七通（二〇）を見ると、「摂取不捨」と書かれていることから、親鸞は摂取不捨の利益によって正定聚が定まると説かれていることが理解できる。

第四節 『親鸞聖人御消息』（『末灯鈔』）における現生正定聚の表現

最後に『親鸞聖人御消息』（『末灯鈔』）に表現されている現生正定聚について考察していく。

まず初めに『親鸞聖人御消息』（『末灯鈔』第一通）において、

眞実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則をまたず。⁵⁶

このように、親鸞の御消息の中でも、この第一通は、親鸞の正定聚に対する理解、すなわち現生正定聚の根拠となる「摂取不捨の利益」が説明される御消息であるとして、挙げられることが多い。

次に、第七通（二〇）においては、

如来の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは、摂取不捨の利益にあづかるゆゑに不退のくらゐにさだまると御こころえさふらうべし。眞実信心さだまると申も、金剛の信心のさだまるともまふし、等正覚にいたると

もまふすなり⁵⁷。

というように、これら第一通と第七通からも、阿弥陀仏の攝取不捨の利益、加えて、親鸞は、信心(阿弥陀仏に全てを任せること)を獲得した時に成立する、つまり、仏の教えに気づき出会うことによって得る利益が正定聚であると説かれていること、そして、親鸞は、信心をいただくのは「今」であるからこそ、どのような死に方をしても浄土に往生することが決まっている、定まる、それが正定聚というものである、ということが『親鸞聖人御消息』(『末灯鈔』)から読み取ることができる。

結論

ここまで論述して明らかになったことは、序論でも述べた「親鸞の正定聚に対する考えは、聖道門と同じように捉えることもできるが、何故重要な思想であると評価されているのか」という問題提起に対して、釈尊入滅後の末法の世界に生きる我々人間は、生きている間に悟りを得ることは不可能であるという考えだけではなく、人間は死ぬ間際まで煩惱を抱え生きていく存在であるという人間の真実の相を明らかにした部分や、阿弥陀仏から疑うことなく受け賜わった信心を獲得した瞬間に救いが成立し、また、その信心は今生に得るのであるから現生正定聚であると説かれ、さらに、正定聚の位に住した者は、すでに往生も定まっているのだから、阿弥陀仏に往

生を願うことも、臨終に来迎を願う必要もないことを説かれたところに、親鸞浄土教の独自の思想、すなわち、親鸞の己証が表れているのである。絶対他力、現生正定聚、往生即成仏等々、これら親鸞の思想(己証)が繋がり合わさることによって、聖道門の正定聚とは違う思想であることが明らかになり、その内容が私の疑問に対する回答であるということを確認することができた。

また、親鸞の正定聚に対する考えやその特徴は、親鸞の多くの著述を深く読み解き、その表現を比較・分析・検討することで、より明らかにすることができる。また、その表現の關係性を深く理解することにより、当初提起した「聖道門における正定聚と類似した考えではないか」という私の疑問が払拭されるとともに、親鸞の正定聚の思想は、聖道門のそれとは全く違うものであることが明らかになり、親鸞独自の思想(己証)と評価される理由があることを再認識することができた。

さらに、親鸞の正定聚における表現方法として重要となるものが、親鸞は現生で往生も成仏に対して「すると説いてはならず、「する」ではなく「決まる」「定まる」と表現していることである。これこそが現生における正定聚の正しい在り方、親鸞にとっての現生正定聚の特徴ともいえるのではないかと、という考えに私は至った。

ただし、「現生正定聚の思想は、そのもの一つだけで十分な意義を発揮するものではなく、これを扶ける思想と密接に連絡してこそ十全となる。」⁵⁸とも言われていることから、この点に関しては、今後の課題としたいと思う。

¹ 現当二益という言葉は、親鸞が述べたものではなく、後の宗教学者が親鸞のこの思想を現当二益と表現したものであるが、今回は「親鸞の現当二益」という表現をする。

² 親鸞は「現生正定聚」という言葉を使っておらず、親鸞の正定聚に対する考えから、後に「現生正定聚」と表現されるようになった、ということはおかなければならぬが、今回この論文内において従来の正定聚と親鸞の捉えた正定聚との違いを区別するために、あえて「現生正定聚」と表現することとする。

³ 本来、定聚は正定聚だけではなく邪定聚や不定聚という意味も示すが、今回は正定聚を示すこととする。

⁴ 初地・歡喜地・不退転地ともいう。

⁵ 中村元『広説佛敎語大辞典縮刷版』八七一頁

⁶ 勸学寮『釈尊の敎えとその展開―インド篇―』一八二〇頁

⁷ 『註釈版』三九四頁

⁸ 本願寺敎学伝道研究所聖典編纂監修委員会『顕浄土真実敎行証文類』二八七頁

⁹ 『註釈版』四七三・四七四頁

¹⁰ 『註釈版』五九五頁

¹¹ 釈尊入滅後、時代の推移と共に世の中が汚辱に染まり仏法が衰微していく仏敎の歴史観のこと。

¹² 異説もあるが、この像法は五〇〇年もしくは一千年続くとされている。

¹³ 藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏敎の思想 第四卷 曇鸞道綽』二五四頁

¹⁴ 日野振作『親鸞聖人と七高僧の敎え』一六五頁

¹⁵ 日野振作『親鸞聖人と七高僧の敎え』一八三・一八六頁

¹⁶ 『註釈版七祖篇』二四一頁

¹⁷ 『註釈版七祖篇』二四一頁

¹⁸ 勸学寮『浄土三部経と七祖の敎え』一七九頁

- 19 『註釈版七祖篇』二四一頁
- 20 『註釈版』四一頁
- 21 『註釈版』一〇九頁
- 22 『註釈版』十八頁
- 23 『註釈版』十八頁
- 24 『註釈版』十八頁
- 25 『註釈版』八三二頁
- 26 村上速水「親鸞のよろこび―現生正定聚の理解について―」『龍谷大学論集』四〇〇・四〇一、九四頁
- 27 桐溪順忍『昭和仏教全集第8部1親鸞はなにを説いたか』二五五頁
- 28 日野振作『親鸞聖人と七高僧の教え』六一四頁
- 29 中村元『広説佛教語大辞典縮刷版』八七一頁
- 30 『註釈版』三〇七頁
- 31 普賢大圓「現生正定聚について」『真宗学』九、三七頁
- 32 『註釈版』十七頁
- 33 親鸞は、真実の証果を躰す文として(一)魏訳『大経』の第十一願文・(二)『如来会』の第十一願文・(三)『如来会』第十一願成就文・魏訳『大経』の第十一願成就文・(四)『如来会』の第十一願成就文を連用するが、前三文においては卒爾に正定聚が現生であると見ることができない。しかし、第四文のみにその証を見ることができると指摘された。と山田行雄氏は述べられている。山田行雄「親鸞和語聖教にあらわれたる曇鸞教学(一)」『龍谷大学論集』一〇六頁
- (一)『龍谷大学論集』一〇六頁
- 34 『註釈版』三〇八・三〇九頁
- 35 『註釈版』三〇九頁
- 36 山田行雄「親鸞和語聖教にあらわれたる曇鸞教学(一)」『龍谷大学論集』四〇〇・四〇一、一〇六頁
- 37 普賢大圓「現生正定聚について」『真宗学』九、三七頁

3 8	『註釈版』	六七九頁
3 9	『註釈版』	六八〇頁
4 0	普賢大圓「現生正定聚について」『真宗学』	三八頁
4 1	『註釈版』	六九三頁
4 2	『註釈版』	五七三頁
4 3	『註釈版』	三〇九頁
4 4	『註釈版七祖篇』	一一九頁
4 5	『註釈版』	六八一頁
4 6	『聖典全書(一)三経七祖篇』	五〇一頁
4 7	浅野教信「和語聖教における正定聚釈の特色」『真宗学論叢』	五、一三頁
4 8	『註釈版』	五六〇頁
4 9	『註釈版』	五六一頁
5 0	『註釈版』	五六七頁
5 1	高木昭良「三帖和讃の意識と解説」	一二五頁
5 2	『註釈版』	二六四頁
5 3	『註釈版』	五七三頁
5 4	『註釈版』	六〇四頁
5 5	『註釈版』	七七八頁
5 6	『註釈版』	七三五頁
5 7	『註釈版』	七七八頁
5 8	五十嵐明寶「『教行信証』における現生正定聚思想の形成と意義について」	一〇、『大東文化大学紀要』

頁

二一 禁止

参考文献

書籍

- 大原性実『真宗教学の伝統と己証』永田文昌堂、一九六五年
- 大原性実『真宗学概論』永田文昌堂、一九五六年
- 大原性実『真宗教学の現代的解明』永田文昌堂、一九六五年
- 梯實圓『教行信証の宗教構造 真宗教義学体系』法蔵館、二〇〇一年
- 金子大栄『真宗の教義と其の歴史』百華苑、一九六五年
- 金子大栄『教行信証講読 信証卷』金子大栄著作集第七卷、春秋社、一九八一年
- 勸学寮『浄土三部経と七祖の教え』本願寺出版社、二〇〇八年
- 勸学寮『釈尊の教えとその展開』インド篇、本願寺出版社、二〇〇八年
- 勸学寮『釈尊の教えとその展開』中国・日本篇、本願寺出版社、二〇〇九年
- 勸学寮『親鸞聖人の教え』本願寺出版社、二〇一七年
- 教学伝道研究センター『浄土真宗聖典（註釈版）』（第二版）（本願寺出版社、二〇〇四年）
- 桐溪順忍『親鸞はなにを説いたか』教育新潮社、一九六四年
- 桐溪順忍『教行信証に聞く』教育新潮社、一九八〇年

- 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』本願寺出版社、一九九六年
- 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典全書（一）』三経七祖篇、本願寺出版社、二〇一三年
- 真宗聖教全書編纂所『真宗聖教全書』二宗祖部、大八木興文堂、一九四一年
- 高木昭良『三帖和讃の意識と解説』永田文昌堂、一九六六年
- 藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏教の思想 曇鸞道綽』第四卷、株式会社講談社、一九九五年
- 内藤知康『安心論題を学ぶ』本願寺出版社、二〇〇四年
- 内藤知康『親鸞の往相思想』法蔵館、二〇一八年
- 中村元『広説佛教語大辞典』縮刷版、東京書籍株式会社、二〇一〇年
- 日野振作『親鸞聖人と七高僧の教え』永田文昌堂、一九八四年
- 普賢大圓『真宗教学の諸問題』百華苑、一九六四年
- 本願寺教学伝道研究所『顕浄土真実教行証文類』上・下、本願寺出版社、二〇一一年
- 神子上恵龍『真宗教学の研究』永田文昌堂、一九七二年
- 村上速水『親鸞教義の研究』永田文昌堂、一九六八年
- 山邊習学・赤沼智善『教行信證講義』第一書房、一九三八年
- 山本仏骨『道綽教學の研究』永田文昌堂、一九五九年
- 龍谷大学真宗学研究室『親鸞思想入門』永田文昌堂、一九七三年

論文

靈山勝海『末燈鈔講讚』永田文昌堂、二〇〇〇年

浅井成海「親鸞の現世利益観」『親鸞思想の研究』真宗学論叢七、二〇〇二年

浅野教信「和語聖教における正定聚積の特色」『親鸞和語聖教の研究』真宗学論叢五、一九九八年

五十嵐明寶「『教行信証』における現生正定聚思想の形成と意義について」『大東文化大学紀要』一〇、一九七二年

岡村謙英「現生正定聚の研究」『真宗學』五七、一九七七年

板原顕示「現生正定聚についての一考察」『宗學院論集』七五、二〇〇三年

梯實円「現生正定聚の成立とその構造」『真宗學』七九、一九八九年

玉木興慈「親鸞の「現生正定聚」考―臨終来迎否定に關して―」『龍谷大学論集』四六二、二〇〇三年

普賢大圓「現生正定聚について」『真宗學』九、一九五三年

村上速水「現生正定聚の理解」『龍谷教学』二三、一九八八年

村上速水「親鸞のよろこび―現生正定聚の理解について―」『龍谷大学論集』四〇〇・四〇一、一九七三年

山田行雄「親鸞和語聖教にあらわれたる曇鸞教学(一)―現生正定聚の一考察―」『龍谷大学論集』四〇〇・四〇一、一九七三年

山田行雄「現生正定聚の必然的論理」『日本浄土教と親鸞教学』真宗学論叢六、一九九九年